

中表紙の次の頁には、聖ペトロ大聖堂で開催された全体会議の様子のモノクロ写真があり、続いて目次がある。その項目は以下のとおりである。

礼典憲章、広報機関に関する教令、教会憲章、東方カトリック教会に関する教令、エキュメニズムに関する教令、教会における司教の司教任務に関する教令、修道生活の刷新と適応に関する教令、司祭の養成に関する宣言、キリスト教的教育に関する教令、キリスト教以外の諸宗教に対する教会の態度についての宣言、神の啓示に関する教義憲章、信徒使徒職に関する教令、信教の自由に関する宣言、教会の宣教活動に関する教令、司祭の役務と生活に関する教令、現代世界憲章。

×

×

これらの項目のなかで「キリスト教の絶対性」との関連で注目すべきものは「神の啓示に関する教義憲章」と「キリスト教以外の諸宗教」の二つであるが、その項目に次のような一文がある。

「すでに古代から現代に至るまで、種々の民族のうちには、自然界の移り変わりど人生の諸事件の中に現存する神秘的な力について、一種の知覚がみられ、時には最高の神、あるいは父なる神についての認識さえも認められる。……ヒンズー教において、人々は、汲み尽くすことが出来ないほど豊かな神話と、哲学上の鋭敏な努力をもって神の神秘を探究し、表現する。……仏教においてはその種々の宗派に従ってこの流転の世が根本的に無常であることが認められ、人が忠実

と信頼の心をもって、あるいは完全な解脱の状態にある道、あるいは自力又は他力によって最高の悟りに到達する道がととのえられる。これと同じように世界中に見いだされる他の諸宗教も…。カトリック教会は、これらの諸宗の中に見いだされる真実で尊いものを何も排斥しない。…：真面目な尊敬の念をもって考察するそれらは教会が保持し、提示するものとは多くの点で異なっているが、すべての人を照らす真理の光線を示すこともまれではない。(一九七頁以下)

×

×

これは、従来のローマ・カトリックの「カトリック即普遍的真理」という頑迷な教条による排他的絶対主義の立場の大変化である。諸宗教のなかに「父なる神の認識さえも認められる」また、「これらの諸宗教の中に見いだされる真実で尊いものを排斥しない」さらに、その尊い真実が「すべての人を照らす真理の光線を示す」ものがあると言ひ、今後、世界の諸宗教との対話を促進していくと宣言したのである。これはカトリック教会の啓示に対する見解が大きく変化したということである。事実公文書を軽く目通して感じることは「礼典憲章」以下「現代世界憲章」までの十六の項目全般の底流に、従来のカトリック教会の「啓示の独占」的態度が薄まり、諸宗教からなる宗教史を救いの歴史に結びつけて「啓示」ということを幅広く捕らえていこうとしている。例えば、公文書の最終章「現代世界憲章」で「このような話し合いの望みは、真理に対する愛のみに導かれ、適当な慎重さを必要としながら、それらの創造主を認めない人や、教会に反対

する人、種々の方法で教会を迫害する人も除外しない。父なる神はすべての人の起源であり目的であり、われわれすべて兄弟となるよう召されている。したがって、またこの同一の人間の、神的召命によってめざれているわれわれは、暴力と欺瞞なしに、真の世界平和建設のために協力出来るし、また協力しなければならぬ。(前掲書三九八頁〜三九九頁)

先に「キリスト教の絶対性」を問う関連で、「第二バチカン公会議」について記したのは、世界最大の宗教教団(世界のキリスト教徒の総数二十億人中十一億人がローマ・カトリック信徒)ローマ・カトリック教会で今、起こっている事柄を見ることで「宗教」が直面している現代状況を理解できればと考えたからである。つまり、現代という歴史的現実がローマ・カトリック教会をも変革せざるを得ない状況にあるということだ。

例えば、マルチン・ルターは当時のローマ・カトリック教会の在り方に疑問を抱いていたとき、「正しい者は信仰によって生きる」(ローマの信徒への手紙一章一七節)というパウロの言葉に接し、「救い」を外面的な業に求めるカトリック教会の誤りに気付き、神の恩恵を信ずる信仰中心の聖書解釈こそカトリック教会の信仰の在り方でなければならぬと主張した。それに対してカトリックこそ唯一絶対の真理とする教会側は、彼の告白に耳をかさず破門と弾劾をもつて応

じ、ルターは墮落した修道士、教会の破壊者、嘘つきと決めつけ、悪魔の化身だと憎悪し、神の名によって処刑に及ぼうとした。しかしザクセン選帝侯に保護されたルターはワルトブルグ城で、当時一般の信徒は目にすることが出来ず、教会の權威によって解釈され、教会だけの所有物だった聖書を、人々が直節読むことができるように新約聖書をドイツ語に翻訳した。この事がドイツ語の統一に多大の貢献をもたらしたと言われている。その後ルターは数々の書物を著すに及んで、ヨーロッパ全域に宗教改革運動が展開されて行ったことは周知のとおりである。この宗教改革陣営のキリスト者全員を指して「プロテスタント」と呼ばれるようになった。

×

×

ルターの掲げた信仰の原理は、一般に「プロテスタント原理」と言われ次の通りである。

第一に、聖書のみが信仰と生活の唯一の規範であること。第二に、キリストによる神の恩恵を信ずる信仰によってのみ神の前に義とされること、さらに第三に、信仰者は神の前で全て祭司であり霊的階級は存在しないこと、等に要約出来る。因みにルターがカトリック教会の信仰理解に批判を掲げたのは一五一七年であった。以後、カトリック教会とプロテスタント教会とは歴史を重ね互いの信仰理解と教会のあり方は変化することはできず、一部対話の座が設けられたが最終的には一致に至ることなく過ぎて来た。

×

×

ところが一九六二年から六五に渡って開かれた第二バチカン公会議は「エキュメニズム教会令」として次のような公文書を出した。

「神のこの単一唯一の教会の中に、すでに初期のころからある分裂が起こり使徒はそれを断罪すべきものとして激しく非難している。後代になっても、最も重大な不一致が起こり、かなり大きな諸集団がカトリック教会の完全な交わりから分かれたが、ときには、双方の人々に過失がなかったわけではない……」（前掲公文書一一五頁）

ここでカトリック教会は、自分たちの側にも、プロテスタント側にも、その双方に責任があったことを公に表明したのである。ここにたどり着くまで実に五百年近い月日を要した。これにともないルターに対するカトリック側の学者達に大きな変化が出てきたと聞く。たとえば「ルターは教会を世俗化より救おうとする神の摂理の手段」「偉大な祈禱者」「当時の教会の知性主義、道徳主義、制度主義にたいして、神の言葉の人格的体験と追求を通して戦った予言者の人間」「すばらしい神学者」「ルターが当初から教会を分裂させる意図を持っていなかった」等（現代のカトリック―坂本堯―）、言うならば、ルターによる改革で教会が分裂したその主要な原因が当時のカトリック教会側の「世俗的精神」によるものであったという反省が生じてきたというこ

とである。

ここでついながら、一〇五四年以来断絶していた東方正教会（ギリシヤ正教会、コプト教会、エチオピア教会等の民族教会より成る連合体）に関する文面をも紹介しておく。

「……東方諸教会が全教会にどれほど大きく貢献したか……この教會的遺産をふさわしく正統に評価尊敬するだけでなく、それがキリスト教全教会の遺産であると堅く信じている。そのため、この教会会議は、東方諸教会が、西方教会のように固有の特別な規律に従って統治する権利と義務とを持っていることを、そうごんに宣言する。」（前掲公文書一〇三頁）

このようにローマ・カトリック教会は、キリスト教会全体に対して融合対話の姿勢を示すと同時に、他宗教に対しても対話の姿勢を示すようになった。このような事は、第二公会議以前では到底考えられないことであり、正に歴史的な事件なのである。この第二バチカン公会議のローマ・カトリックの体質の変革について、イギリスの歴史家トインビーは次のような意味のことを語り評価したという。「千年後の歴史家は二十世紀という時代をどう描くだろうか。ある国で自由主義者と共産主義者とが争っていたなどということには彼らはあまり注意を払わず、キリスト教と仏教と、西洋と東洋とが本当に対話を始めて、そこに両者が互いに浸透し合う何物かを発見し

た世紀として二十世紀を位置づけるだろう。」

×

×

しかし、ローマ・カトリック教会の現実には公会議に於ける改革に対してさえもその内容の不徹底さに不満を抱く人達が中南米アフリカ等を含めた世界各地に多く、聖職主義、独断主義、排他主義の残存に失望した信徒達が徐々に教会から離れて行くという現象がおこりつつあると聞く。事実、わたしの周囲にいる誠実で熱心なカトリック信徒の幾人かから改革の不徹底性の不満と失望の声を聞いた。しかし一方では、従来の教会の在り方を支持し改革を善しとしない者もあり、今やローマ・カトリック教会は、改革推進派と従来の在り方を温存しようとする保守派との間で揺れ動いているようだ。たしかに、前掲の翻訳された公文書に大雑把に目を通して、その表現に躊躇を感じられるし、今一步ということに欠けており期待したほどには満足を覚えぬ。

このような現象はいろいろな立場から集約できるが、一つの見方としては、教会の権威と個人の信仰の問題、又はヨーロッパ中心の神学と非ヨーロッパの神学の問題だと見るむきもある。つまり、個人の信仰を無制限に是認して行くとバラバラとなって全く統一を失い、信仰そのものが解消してしまいかねないし、一方、教会の権威を強調すると個人の信仰の自由が阻害されてしまうことにもなる。この問題は巨大組織宗教集団であるカトリック教会だけの問題でなく、諸教派に限りなく分裂しているプロテスタント教会が抱える問題でもある。さらに一個の教会そのもの

が抱えている課題でもある。さらに、国家や社会的存在としてのあらゆる組織に於ける人間のあり方の問題にも連なっていくことであろう。

いずれにしても、この問題は単に対立的に取り上げ、何方が正しいかという問題ではなく、それぞれが何処に立って世界化するか、ということである。世界化とは、言うならば「共に手を取り合う」ということである。第二バチカン公会議は、この課題について、従来のスコラ主義的手法でなく、聖書の御言葉に基づく「対話」という原則を掲げたことは歴史的成果であったと言える。今後の問題は「対話」の姿勢を崩さず後退させることなく何処まですすめていくかであろう。

×

×

「和の時代」が一九六二年以降始まったと十五年程前に言ったことがあるが、厳密には「和へ向かう時代」の始まりと言うべきであって、それは「対話へ向かう時代」と言い換えることができよう。だが、こうした反面、内に向かって固まろうとする民族的、党派的な動きが一部に見られるが、もはや今日に於いては、どのような主義も主張も教義も、絶対的且つ普遍的な固定的真理または権威として立てることは出来ない時代状況にある。かつての共産主義国家ソビエト連邦の崩壊もその現れの一つだが、公会議をしてカトリック教会の教義や制度の見直しへ押し上げ、さらに歴史主義の機運の高まりへ導いたのも、現代という歴史的状况である。ここでいう歴史主義とは大まかに言えば、あらゆるものを歴史的生成に於いて捉える立場であり、それ故に、もの

を個性と発展という目で見ていく立場である。

それにしても、教皇ヨハネ二十三世がバチカン内部の反対と危惧とを制し、第二公会議の開催を決断し推進させた力を彼は、神のお働き即ち御聖霊の導きであると確信していたと聞く。そのとおりだと思う。一九六三年六月彼は会議の閉会を見ることなく癌で逝去した。

×

×

「キリスト教の絶対性」を問う観点からローマカトリックの第二バチカン公会議の結果をみると、それは包括主義的立場であることに気付く。

包括主義とは、キリスト教のみが絶対に正しい宗教であって、それ以外に救いは全く無い、とする排他的絶対主義とは異なり、他宗教の内にも救済の可能性は認める、が、それはキリストの贖罪の業の結果によるものであるという立場である。つまり、他宗教には自覚されていないままでキリストの真理が包括的に無名で働いている、というのである。

例えば、先に掲げた「第二バチカン会議の公文書」は次のように語っている。

福音を受けなかった人々も、いろいろな意味で神の民へ秩序づけられている。……また本人の側に落ち度がないままに、まだ神をはっきりと認めていないが、神の恩恵に支えられて、正しい生活をなそうと努力しようとしている人々について……教会は、彼らのもとに見いだされるよい

もの、真実なものはずべて福音への準備であつて、ついには救われる命を得るようにとすべての人を照らすかたから与えられるものと考える。(前掲公立書「教会憲章」五十九頁)とすると、包括主義の立場も結局はキリスト教の救済の究極的絶対性を保つたままであると言える。これは、キリスト教の救済の絶対性と他宗教の救済的価値を容認するという矛盾を止揚しようとする、排他的キリスト教の絶対主義の形を変えた穏便なキリスト教絶対主義に他ならないと言えよう。その意味では、ローマ・カトリックの第二バチカン公会議の基本的方向づけは、キリスト教の絶対性は残されたままであると言える。それに対して今一層ローマ・カトリック教会の改革を求める信仰人が、それぞれの立場からの運動が起こつて来ることになった。また、後で紹介する「宗教多元主義」という立場が生じて来る理由があつたと言える。

×

×

このような事柄はローマ・カトリック教会だけに生じているのではなく、プロテスタント教会も同じである。ただプロテスタント教会といつても、その信仰理解がさまざまであり多様化している。例えば、信仰的な頑迷さで、聖書の文字を絶対的真理とみなし、自らが立っている状況がどうであろうと一切関係なく、キリスト教の唯一絶対性を確信し他宗教排他主義に立っている教派がある。一方に於いて、聖書に対して極端なリベラルな関わり方を標榜するグループもある。勿論これらの中間的な立場に立っている教派や教会もある。従つて、プロテスタント教会はロー

マ・カトリックのように単一の見地で論ずることは出来ない。しかし、極端な保守的な福音派、又は神癒や異言など聖霊の賜物の働きを重んずるペンテコステ派などの教派等は参加していないが、世界の多くのプロテスタント教会の参加を得て結成されている「世界教会協議会」(WCC)の総会の紹介文などを見るかぎり、一九四八年にアムステルダムに於ける第一回総会以降、先ずキリスト教会内での教派間の一致は勿論の事、「キリスト教の絶対性」についての各教派の姿勢が明らかに先述の所謂「穏便な包括主義」に移行しつつあることが分かる。この動きに伴い、ローマ・カトリック教会とプロテスタント教会との一致への動きが始まった。これについては第二バチカン公会議の「エキュメニズムに関する教令」(前掲公文書)で先に紹介したとおりである。

しかし、これらの「包括主義」は、いずれにしても結局はキリスト教の究極的絶対性を保ったままであり、穏便なキリスト教絶対主義なのである。

×

×

では一体、ローマ・カトリック教会やプロテスタント教会の一般が、何故「包括主義」に留まり、「包括主義」の立場を乗り越える事が出来ないのだろうか。またその結果「宗教多元主義」が生じ、キリスト教の将来の在り方を示す一つの立場が出てきたのか。これらの事柄を含め、私の信仰による態度を語ろうと思うが、その前に、世界のプロテスタント教会を中心にして結成さ

れている「世界教会協議会」が立っているキリスト教理解の基本的態度について、わたしの理解する範囲で少し述べておこうと思う。

×

×

先にも述べたとおり、プロテスタント教会はローマ・カトリック教会のような単一の教会集団ではない。旧約聖書と新約聖書を共に正典としても、その解釈や神学的な立場、または教会の在り方がそれぞれ伝統的にも異なっている。それ故に、互いに自派の信仰理解を主張して分裂し対立する事が多く、宗教改革に於いて生まれたプロテスタント教会のそれ以後の歴史は、事の善悪は別にして、分裂分派を生み出す歴史であったとさえ言える。

勿論、ローマ・カトリック教会もその初めから単一の信仰告白によって立っていたわけではない。更に、キリスト教会が歴史上に生まれて来るに到るまでに、すでに紆余曲折があったが、それを一つに方向づけて来たのは所謂「同一な信仰告白」であった。「信仰告白」には色々な意味が込められているが、大切な一つは「個人が信ずることを宣言することであろう。その意味では信仰告白とは極めて個人的なことである。しかし、その個人の告白が多くの個人に於いて同一になされたとき、全体の信仰告白となる。と言うことは、一つの信仰者の集団の同一な告白となり、その結果、告白せしめられた信仰者の集まり、即ち組織としての教会が必然的に現成して来たのが、新約聖書にある教会、即ちキリスト教原始教会であった。そのような教会に於ける信仰

告白が「信条」と呼ばれ、その古代の教会世界で生まれた「同一の信仰告白」の整理された一つが所謂「使徒信条」と称せられるものである。その後さまざま「信条」が教会の歴史的な歩みの中から生み出されて来た。が、ではその信条の内容は何だったのか。

×

×

教会に於ける信条は信仰告白であることを先に述べたが、その基本は「イエスは主である」ということを内容とする。したがって、その告白は人間側の恣意、つまり個人的な経験や単なる信仰生活の証しなどの結果による告白ではなく、神の愛キリストの恵みに対する応答として生ずる内容であることはいうまでもない。だから「信条」の内容は第一に、キリストの救いとその栄光に対する賛美の告白から始まる。このような告白は新約聖書のあらゆる所に直接的に又は隠喩として見いだす事が出来るのは当然であろう。問題は、信仰告白の基本としての「イエスは主である」ということが、具体的に何を意味しているか、というところにある。ここに、信条の内容についてさまざまな問題が生じてくることになった。

ここでは各信条を列記紹介することが目的ではなく、またそれは私の能力の及ぶところではない。ただ「世界教会協議会」との関わりに於ける信条の位置づけを語るために、常識としての信条について語っているのである。

それにしても、使徒信条は、聖書に基づく信仰から自然発生的に生まれ、整理されて出来上が

った信条であると言われている。しかしその後生まれた信条はすでにイエス・キリストをどのよう理解するかという神学的展開があり、一つにはキリスト教信仰におけるイエス・キリストの持つ意味を問う所謂「キリスト論」があり、またイエス・キリストの「三位一体論」に於ける位置づけ、つまりキリストの位置づけについての神学的な見地からの反省と判断とがみられる。しかし多くある信条の中で、使徒信条とニケア信条それにアタアシオス信条は一般に「基本信条」として受け入れられて来た。さらに信条について関心の有る方は、それぞれの信条を自分で検証していただければと思う。

×

×

とにかく信条がそれぞれの信仰告白として展開されるにつれて、神の言に対する共同体としての教会の応答としてさまざまな応答の形が生じて来た。それは結局教会が聖書を読む読み方、即ち聖書の解釈の違いによるものであり、更に教会が置かれている時代状況によっても異なってくることによる。それが教会の分派となった。そのよう教会分裂の姿を憂い、すべての教会の一致への手立てが東方教会と西方教会の間で中世紀に努力されたこともあったが、実際の一致への活動、即ち一般にエキュメニズムと呼ばれている運動は二十世紀に入ってからのことで、本格的な開始は第二次世界対戦後の一九四八年にアムステルダムに於ける「世界教会協議会」の設立からであった。

「世界教会協議会」の第一回総会は一九四八年にアムステルダムに於いて開催されたが、それは人類にとって空前絶後の惨劇を生み出した第二次世界大戦の状況が、教会に突きつけた問いに對する教会側の応答として生まれたものである。その状況とは、戦争による世界的な悲惨は人間の英知の敗北、また宗教に對する不信ということであり、特に、キリスト教会が悲惨な戦争に全く無力であったということである。この状況は、教会側に深刻な悔いを生み、神に對する悔い改めが世界教会の一致への運動を出現させたのである。したがって世界教会一致運動には神への応答として二つの願いと祈りが基底にある。一つは、世界のすべての教会が神の前に一つに成ること。他の一つは、教会が主と仰ぐイエス・キリストの存在と業は、ひとり教会内に関わることでなく、教会外のすべての人々——その人がどのような思想、信条、またはいかなるイデオロギ—によって立っていようと——の救いの為である故に、教会はそれらの人々に仕え、宣教するということである。その意味で「世界教会協議会」の運動は、歴史的神的状況が鋭く投げかけた問いに對する、教会の信仰的な応答であったと言える。このことは、第一回以降の総会の主題だけを見ても推測できる。以下参考のために各総会の主題を列記しておく。

第一回総会主題「世界の混乱と神の救済計画」（一九四八年・於アムステルダム）

第二回總會主題 「キリスト―世界のための希望」 (一九五四年・於エバアンストン)

第三回總會主題 「イエス・キリスト―世の光」 (一九六一年・於ニューデリー)

第四回總會主題 「見よ、私はすべてを新たにする」 (一九六八年・於ウブサラ)

第五回總會主題 「イエス・キリストは開放し―つにする」 (一九七五年・於ナイロビ)

第六回總會主題 「イエス・キリスト―世界の命」 (一九八三年・於ヴァンクーバ)

第七回總會主題 「来たれ、聖霊よ、全被造物を刷新したまえ」 (一九九二年・於キャンベラ)

尚、これらの各總會に到る間に、特定の主題が部会や委員会で討議され、教会間の一致のための熱心な討議がすすめられ、共通理解したそれが文書化され採択される作業がおこなわれているようである。例えば、一九八三年の第七回總會に「信仰職制委員会」が熱心に討議し続けてきた「洗礼」や「聖餐」それに「教会の職務」に関する文書(一般に「リマ文書」と呼ばれている)は、ローマ・カトリック教会との合意を得た文書として採択されたことは教会一致運動としての大きな前進であると評価されている。

×

×

世界教会の一致は、世界の今日的状況、又は歴史的現実がキリスト教会に突きつけている促しである。それは他でもなく、今日教会が神に対して応答すべく決断を求められているということ

である。その意味では、先に述べたローマ・カトリック教会は第二バチカン公会議に於いて、一つの応答を決断したと言えよう。しかし、その応答は、神が今日という状況に於いて投げかけている問いの状況認識が、未だ十分とは言えないのではないか、ということはずでに記したとおりである。それは「世界教会協議会」の現状に於いても同じである。その理由はいくつかあるのだろうが、大きな理由の一つは、キリスト教信仰そのものが内にかかえている「キリスト論」にある。

×

×

キリスト教にとってイエス・キリストは信仰の中心であり、それを抜きにしてはキリスト教は成り立たないことは言うまでもない。キリスト論とは、そのイエス・キリストをどのように理解し信じるかということであり、キリスト教信仰にとってイエス・キリストがどのような意味をもつかということである。それはとりもなおさず、キリスト教の根拠、またはキリスト者自らの信仰の根拠を問うことでもある。

このようなキリスト論にとって、そのイエス・キリストを神の唯一の啓示者、人間の救い主とする事から問題が起こつて来る。つまり、イエスという歴史的な存在者が、同時に神のひとり子、人間の救い主であるということの、その関係如何ということであり、イエス・キリストの人性と神性との分離と結びつきとの関係の問題である。古来このキリスト論を巡ってさまざまな論争が

なされ、「異端だ、正統だ」と生死をかけた激烈な論争がなされて来たことは周知のとおりである。これについて一部の人達は、それは神学的な視点からの問題であつて、聖書が語るところに単純に従えば、問題は簡単なのだと言う。しかし、問題はそれほど簡単なことではない。これについて新約聖書の証言がすでに多様性を持っており、釈義的にそれほど単純なものではなく、問題の発端は聖書が語っているイエス・キリストについての証言そのことから始まるのである。

キリスト論の問題は更に、先にも言ったように、イエス・キリストを神の唯一の啓示者とするその真理性の根拠はどこにあるのか、という問題でもある。このことについては後で「キリスト教の絶対性」について改めて問うときに、御一緒に考えたいと思うがここで提起しておきたいことは、聖書は信仰の書として人間を超えた神からのそれということを十分に受入れつつ、なお聖書にそのように記してあるから、その真理性は妥当するのだという単純な前提から始めてはならないということである。それは、信仰というより妄信の類に属するからである。このことについては、先にも言ったとおり後で考えたいと思う。

さらに、キリスト論は、ただキリスト・イエスに対する信仰の事だけでなく、イエスをキリストと告白するなら、そのイエスの信仰そのことが、告白する者の在り方を示唆することになり、ここに貧困、差別、抑圧に喘ぐ人々に対する愛の在り方がキリストを問うことよって生じて来ることになる。このようなキリスト論の視点から生まれて来た運動がラテン・アメリカで始まっ

た「開放の神学」であり、韓国に於ける「民衆の神学」さらに北アメリカの黒人の間で成立し、キング牧師等に代表される「黒人神学」などと称される神学であり運動である。その影響は今日第三世界に広まりつつあるといわれている。これらについてはここでは特に取り上げないし、わたしに論じる能力はない。

×

×

いずれにしても「キリスト論」の問題について「世界教会協議会」の基本的な立場は、イエス・キリストの神性に関しての聖書の語りを、イエス・キリストの本性、つまり、神の存在様式、即ち父・子・聖霊という三位一体論的論議から、イエス・キリストの神性と人性との関わりを神学的に明らかにするという論議からではなく、神がイエス・キリストにおいて、私たち人間の全存在を救済する為になされた神の一方的な恩寵の業への言い表しとして受け取るということである。これを人間の側からの告白として言うなら、「イエス・キリストは私たちの救いのために行われた主である」ことになる。さらにこの告白を簡明に信仰的に言い表すなら「イエス・キリストはわたしの主である」ということになる。この信仰告白に於いてこそ「世界教会協議会」が、まさにその言葉どおりに、世界の教会の一致への手掛かりとなるのであり、一方に於いて、世界の様々な思想信条を持つ人達に対しても対立的且つ排他的に関わるのではなく、それらの人々に謙虚に仕えつつキリストを証しする道が開かれたということになる。このような基本的なキリスト

論の姿勢は、「世界教会協議会」に対する、ルドルフ・ブルトマンやカール・バルト等のキリスト論による提言を受け入れたことによるとのことである。この「世界教会協議会」が立つ基本的姿勢を念頭におきながら、先に掲げた各総会の主題を見ると、その時代状況に教会が関わる神から託された使命と責任とを共に全うしようという祈りと努力が伺える。しかし、そのような基本姿勢は世界のキリスト教会の一致への道を大きく開くことにおいては十分なものであっても、世界の他宗教に対する姿勢としては十分とは言えない。それは結局、先にも述べたとおり包括主義的態度であり、穏便なキリスト教絶対主義に他ならない。このことは、同時にブルトマンやバルトのキリスト教の信仰理解の限界でもあるのかも知れないと、全くの門外漢なりに思ったりしている。今ひとつ残る問題がある。それは「キリストの贖罪」についてである。

×

×

先にローマ・カトリック教会の「第二バチカン公会議」について少し述べ、「世界教会協議会」について語っているのは、それを紹介するためではなく、私自身が突き当たった「キリスト教の絶対性」という問題が、実は私だけの問題ではなく、「ローマ・カトリック教会」や「世界教会協議会」に於いても問われている問題であるということ、即ち、今日のキリスト者個人を含めたキリスト教会全体に、時代そのものが突きつけている問題であるという時代状況を認識するための手掛かりの一つとして語っているのである。したがって、それらの会議や協議会を論じる

知識が私に十分あって語っているのではない。例えば、「世界教会協議会」の歴史なども厳密には一九四八年に設立される以前に、一七世紀末から開始された各伝道協会がやがて協力一致してその業を推進すべく一九一〇年にエジンバラにおいて会議が開催されたときにその端を発することである。その後、各教会の信仰職制等その他に関する教会一致のための具体的な対話がすすめられる活動が別に起こり、やがてこれらの運動体が合流するに到ったのが一九四八年に設立された「世界教会協議会」(WCC)である。さらにローマ・カトリック教会に於いても一致への活動の経過があり、そしてその両者の対話が始められ、そこでの祈りと努力の実とでもいうべきものが「新共同訳聖書」の出版であった。だが、私には「世界教会協議会」の歴史的な経過を詳しく解説する能力はない。これらのことをここに記すのは、先にも述べたように「キリスト教の絶対性」を私自身の問題として取り上げる関連で、キリスト者個人を含めたキリスト教会がその信仰の在り方を二十一世紀に向けて問うているのである。このことを再度確認して以下すすめていく。

×

×

どの宗教も人間の救済について示すことをその務めとしているが、キリスト教は「贖罪」ということを基本に据えている。ところがこの基本的な教えである「贖罪」について聖書の解釈にさまざまな相違した立場が生まれ、その結果当然のこととして分派が教会に起こり、それぞれの解

釈のもとで洗礼や聖餐といった聖礼典が行われるようになった。このような事態について、或る人達は「聖書の言葉に忠実に従えば問題はなにも起こらない」とするだろうが、実はどの解釈をとる分派の教会も、自分たちこそ聖書を正しく解釈していると信じているのであって、言わば当の聖書自体にさまざまな贖罪解釈を生ぜしめる原因があるのである。ここに「贖罪論」ということが起こって来るのであって、決して神学という単なる理屈だけの世界のことではないのである。したがってどの解釈も隠喩的な解釈であり、絶対に正しいとする解釈はそこにはないのである。幾度も言うがそれが起こって来る原因は「聖書自体」にあるのであって、人が聖書を除外して勝手に作り上げた理屈なのではなく聖書の語りに忠実であればあるほど、隠喩的な贖罪理解になるのだということだ。ここに幾つかの類型の贖罪理解が起こってくる必然性がある。

×

×

私はここで「贖罪論」を展開しようとしているのではない。世界の教会が一致しようという場合に生じてくる教会（教派）間の立場の相違の原因について述べているのである。このところ「世界教会協議会」の積極的な存在理由があると言える。つまり、教会（教派）間の対話を重ねることによって、神の御旨である世界の教会が一つと成り、神の創造の目的にそった義と平和とが、どのようにすれば世界に実現できるか、ということをお願い且つ努力しているのが「世界教会協議会」であるということだ。この願いを実現するために、「キリスト論」を三位一体論的に

展開しないで、神がイエス・キリストにおいて、私たち人間の全存在を救済するためになされた神の一方的な恩寵の業の言い表し、と理解することで、教会一致への手がかりとしたごとく、「贖罪論」の場合も正面切つてそれを神学的に展開するのではなく、イエス・キリストの出来事、即ちキリストの生と死と復活こそ、神の具体的になされた贖罪の業であるという基本的理解に立ち、そこから「洗礼」をキリストの死と復活への参与、即ち罪の赦しと聖めであり聖霊のわざだとなし、更に「聖餐」については、イエス・キリストによる神の和解の行為の想起であり、執りなしの主として生きておられるキリストの犠牲の秘儀だということ、ローマ・カトリック教会を含めたすべての教会を一致せしめる共通理解としたのである。しかし、一方にはこのような教会一致のための包括主義的な態度に反対する教会勢力もあるようだ。さらに教派間レベルではなく、キリスト者個人または、地域的な交わりの中から一致への対話がすすめられた、共に歩もうとする現象も現われてきているようだ。

×

×

以上のとおり「キリスト教の絶対性」の克服という観点から、「第二バチカン公会議」と「世界教会協議会」の動向を概観してきて素朴に感じることは、時代状況をとおして投げかけられた、言わば神の問いに、真摯にそれぞれの教会人が応えようとする努力と折りとを強く感じる。だが一方に於いて、現状はキリスト教の絶対主義にとどまっているように思われる。その意味で、

「キリスト教の絶対性」を問うことの難しさをあらためて実感する。しかし、この問題は今日の時代状況に生きるキリスト者として、やはり無視出来ない問題である。たしかに此の問題と誠実に対峙しようとする信仰人にとって難問である。しかし、信仰的決断として私自身答えなければ一歩も前に進む事が出来ない。これを曖昧模糊として看過するなら、わたしの信仰的実存は成り立たず、したがって、神や信仰を語ることも出来ない。

×

×

状況を通して私に突きつけられている問いは、かつてイエスがフィリポ・カイザリア地方に行かれたとき、弟子たちに「人々は、人の子のことを何者だと言っているか」と尋ねた後、「それでは、あなたは、わたしを何者だと言うのか」と弟子たち一人ひとりに応答を迫られたが、それは他でもなく今、私自身に突きつけられている問いでもあるのだ。(マタイによる福音書一六章一三節以下)

×

×

私たちは、イエス・キリストについて世間の人達が語るそれを、ときとして弁舌爽やかに語る。曰く、「〇〇の本にはこのように記してある。××先生は……△△神学者はこのように語っている」と。だが、イエスは「あなたは、何と言うのか」と問われる。

私たちは、イエス・キリストについて「聖書にそのように記されてあるから」と言い、又、

「そのように教会で教えられて来たから」と言う。だが、イエスはそのような教条的且つ機械的な答えを求めておいでになるのではない。その答えは軽率さを免れまい。イエスの求めは「あなたは、何と言うのか」と「あなた自身」の応答を求めておいでになるのだ。私たちは、ときとして、ただ熱心に思い込みの信念でイエス・キリストを自分で捕まえてしまい、その信念で自分を縛り、縛った自分の姿に自分の信仰を見てしまうことがある。それは厳密な意味で信仰とは正反對のことだ。ただの自分の確信であり信念でしかなく、熱狂的な自己主張であり、そこには、常に狂信妄信の類に墮する危険性が秘められているのではと言えまいか。だからこそ使徒パウロはそのような人達について次のように語っている。

兄弟たち、わたしは彼らが救われることを心から願ひ、彼らのために神に祈っています。わたしは彼らが熱心に神に仕えていることを証ししますが、この熱心さは、正しい認識に基づくものではありません。なぜなら、神の義を知らず、自分の義を求めようとして、神の義に従わなかったからです。

—ローマへの信徒の手紙十章一節以下—

「熱心」とは熱狂であり、「正しい認識」とは深い知性であり深い悟りの事である。またパウロは靈的熱狂者の祈りについて次のように戒めている。

霊で祈り、理性でも祈ることにしましょう。霊で賛美し、理性でも賛美することにしましょう。

—コリントの信徒への手紙一四章一四節以下—

信仰は「信・知」であり、命のたぎりへの「覚」に導かれて完成するのだと密かに思っている。いづれにしても以下に於いて、現代状況に生きる一人の信仰人として私の宗教的実存からの応答を、その正否は別にして語らせていただきたいと思いますと思う。

五 あとがき

私が京都の「左京教会」に参りまして、そこに集う教友と礼拝をご一緒させて頂くようになったのは一九五五年二月からで、今年で四十六年になります。二十世紀後半のほぼ半世紀を過ごしたことになります。

二十世紀は戦争の世紀と言われ、世界的に激動の時代でありましたが、キリスト教にとりましても、十九世紀が世界に向かって宣教の世紀であったとするなら、二十世紀は反省の時代であったと言えましょう。近代的な諸々の学問は現実の世界を説明するのに「神」の存在をもちや前提にせず、この世をこの世から理解説明し、人間の知性の力で全てをコントロールするようになりました。そして、度重なる近代戦による悲惨な経験は、正義の神が愛をもって歴史を支配し守って下さるといふ信仰を、根っこから崩してしまいました。さらに近代人の自律と自立の精神は、自己の主体性を強調し、例え神と言えども他から支配されることを拒否するようになりました。さらに聖書特に新約聖書福音書の学的歴史的批判研究はその内容批判にまでいたり、新約聖書の考え方をそのまま現代に持ち込むことの不可能性を指摘するようになりました。一方、現実世界の世俗化はますます加速し、神への無関心は増大しつつあります。さらに、世界のグローバル化

に伴い、キリスト教の唯一絶対主義は根本から厳しく問われています。

このような歴史的現実の只中であって、聖書の福音に生き、その福音を現代人に宣べ伝えるべく神からの召命の信仰を以て立とうとする一信仰人である私自身、その信仰の在り方を問わねばならなくなつたのです。つまり、伝統的なキリスト教の教条を同語反復するだけでなく、新約聖書の古代的表現を解釈して、聖書が秘めているその真理性を現代人に理解可能な形で自らの信仰で取り出し語る必要に迫られたのです。ここに、それ迄の自分の福音理解、聖書理解を根本から問ひなおす必然性があつたのです。その作業を具体的に左京教会で実行しはじめ、また、教会の週報紙上で語りはじめたのが一九七〇年からです。その後一九八四年五月に至つて「みちしるべ」という機関誌を作り、その誌上で「わたしの問い続けてきたこと」と題し、反省的に散文風」に書き始めたのが一九九二年七月からであり、以来現在も続けています。

その間に「みちしるべ誌」を纏めて、「わたしの問いつづけてきたこと（上）——イエスの信仰——」と題して一九九三年に、又、「わたしの問いつづけてきたこと（中）——パウロの信仰——」と題した冊子が一九九八年にそれぞれ左京キリスト教会から発行されました。そしてこの度、「わたしの問いつづけてきたこと（下Ⅰ）——私の信仰——」が、教友の小野恵子姉の協力の下で発行されることになりました。これらの冊子は、現代状況の中で一求道者として生きる私自身の信仰の器量で、私の信仰を気ままに記したものです。同じ求道の友としてお読み下さる方があり、且つ、

お読み頂くことで、幾ばくかの共感を得て、ご一緒に更なる求道への歩みに少しでもお役にたてるなら、神に感謝したいと思います。

二〇〇一年七月一五日

松下 昌義

松下 昌義
1931年生まれ
左京キリスト教会牧師

みちしるべ文庫 26
わたしの問い続けてきたこと (下I)
—わたしの信仰—
2001年8月10日発行

著者 松下 昌義
発行所 左京キリスト教会
京都市左京区下鴨南茶ノ木町29
印刷所 片桐軽印刷 (有)
